

書評 渡辺恒夫（2020）前門の狼を追い払うため後門から虎を入れてしまった
『哲学は対話する—プラトン、フッサールの〈共通理解をつくる方法〉』を批判的に読む

書評（ノンフィクション部門）

前門の狼を追い払うため後門から虎を入れてしまった 『哲学は対話する—プラトン、フッサールの〈共通理解をつくる方法〉』 （西研 著、筑摩書房、2019）を批判的に読む

渡辺 恒夫¹

1. 本書の肯定面—心理現象学への方法論的示唆

この著者の『哲学的思考』[1]を読んだことのある読者にとっては、その続編ともいえる待望の力作が出た。——といっても、評者のような心理学徒から見れば本書はまぎれもない哲学書だ。タイトルに過不足なく表されているように、哲学の方法を、「よい」「正義」といった価値の「本質」つまり意味と根拠を、対話を通じて共通理解にもたらそうというところに求める野心的な試みだ。しかもその始まりをプラトンの対話篇に求め、現代におけるその継承発展を、フッサール現象学を元来实现してゆこうという。

にもかかわらず本書には、現象学を現代的な心理学、つまり心理現象学（psychophenomenology）として展開してゆくために有益な、手がかりがいくつか見いだされる。そもそも現象学の方法の二本柱は、哲学的現象学と心理現象学とを問わず、エポケーから始まる現象学的還元と、本質観取にある。ところが本書でも指摘されているが、フッサールは本質観取の方法を詳らかにしていない。想像的変更がその具体的方法だと言われても、哲学とは違って心理学研究は、体験をテキストとして公共的にアクセス可能なデータ化したものに基つかねばならないので、そのままでは使えない。

このあたり評者は、ラングドリッジの、「フッサールはどのような個別的経験からでも本質を識別することが可能だと確信していたが、現象学的心理学者は本質というものを、多数の当事者による多元的な記述を通じて識別しようとする傾向があった。これは事実上、標本収集による想像的変更である」[2] (p. 26) を踏まえ、多数の体験記述テキストを比較することが想像的変更に相当すると説明するようにしている。そして本質観取を、クスト間の共通項の抽出による普遍化と、差異項の抽出による精緻化を重ねつつ、その体験が成立するのに必須の構造（＝本質）へと接近してゆく無限の過程、と定式化して多数の夢事例分析に適用したのだった [3]。

西は、哲学の方法を対話ととらえ、大学や企業のワークショップで実践してきたというが、本質観取の方法としては、多人数による対話と多数の事例を読むこととは、構造的には同一だろう。そして、他者の体験を現象学的にはどう扱ってよいかと問題に逢着するところも。私はこれに対して「一人称的読み」を提唱している [4] (p. 11)。それはたとえば、漱石の『夢十夜』で記述されている夢を読むのに、自分が漱石であるような可能世界の中で見られた自分自身の夢テキストを読むように読め、ということになる。このあたり納得しがたいという人もいるだろう。その点、西は、次

¹ 東邦大学名誉教授／心理学・現象学。「コミュ障」「夢」「自我体験」等の研究を通じ現象学の心理学化を目指します。著書『人文死生学宣言：私の死の謎』（共編、春秋社、2017）等。JCB02074@nifty.com

のように巧みに説明している—「他者の挙げる体験例が自分自身の過去の同様な体験を呼び起こしたり、あたかも自分が体験したかのように実感をともなっておりありと思ひ浮かべられるならば、それは私自身の体験の自由変更の一例とみなすことができる」(p. 292)。「他者の語るエピソードや他者の行った本質記述に触発されて、自分が気づいていなかった大切な論点に気づかされることもある。『なるほど言われてみれば、確かに自分の体験もそうなっている』、複数人で具体的な事例を出しあって本質観取を行っていくと、しばしばそういう気づきがある」(p. 294)。

ちなみにこの、哲学対話ワークショップの中では、自分の死についても取り上げられているのが興味深い。そのスタンスは—「自分の死を知覚することは不可能である。だがこの場合も、『自分の死に対して自分はどのような想いをもっているか』という仕方では問うならば、各自が自分なりの答えを出すことができる。『死に対する想い』は自分自身のなかにあるからである」(p. 267) と言って、学生などとのワークショップを行ってきたという。私は、自分の死のような直接経験を超えた事柄に関しては、検証も反証もできない以上、仮説は成立せず、世界観モデルを構成しうるだけだと考えている。ただしモデル間にも優劣があって、(1)内的整合性・無矛盾性、(2)体験適合性(自分の体験にとってしっくりくること)、といった基準がありうると思っている。西の言う、死に対する自己の想いを明らかにするというアプローチは、この体験適合性の解明ということに通じるかもしれない。

そのように色々と、心理現象学の実践の上で学ぶべき点があるにもかかわらず、本書には根本的な〈限界〉がある。それは、前著でも感じ取られたのだったが、本書では克服に向かうどころか、ますます遠ざかることになってしまっている。

2. 本書の限界と課題

個人的なことでは恐縮だが、評者は十数年前、現象学を本格的に始めたばかりの頃にノルウェーのフィヨルドに面した町で初めて会って以来、西からは色々教えられてきた。特に、『哲学的思考』の「あとがき」に次のくだりを発見したときには息を呑んだ。

「人は、ある種の問い—『世界は私にとってだけ存在していて、じつは私が死んだらなくなってしまふかもしれない』『私はなぜこの私であって、他の私ではないのだろうか』というような問い—に捉えられてしまうことがある。こうした問いは、日常生活のうえでは無意味で役に立たないものだから、口に出しても共感されることが少ない。しかし哲学の世界はちがう。実生活に役立つものが役立つまいが関係なく、それをとことん納得できるまで考えつづけてよいのだ！」[1](p. 443)

息を呑んだというのは、評者は二つの問いのうち前者のようなものを「独我論的体験」、後者を「自我体験」と呼んで、まさに研究テーマにしていたからだった [5]。だから本書でもこの問題の進展が見られると思ったのだが、期待外れだった。たとえば第12章「〈超越論的還元〉と認識問題の解決」では、現象学的還元によって私は二重性をもって現れるとして、「私の二重性」と題した図が置かれている (p. 341)。この図はいやでも自我体験の問いを連想させてしまう。なぜなら、「一切が現れて来る私」がなぜAさんやBさんでなく同じ皆の中の同類であるこの私なのかという疑問こそ自我体験に他ならず、この図はその現象学的体験構造の図解に当たるからだ。ところが本書ではそれにつ

いての言及は一切ない。まるで20年前に自分で書いたことを忘れたかのように。

その原因は西が本書で、主観客観一致の問題(主客の難問)を近代哲学の中心問題だとしているところに求められよう。そして、「客観的世界との一致は不可能ということをも認めた上で、『合理的な根拠をもって人びとの間で共有しうる知=合理的な共通理解』はありうるはずであり、この合理的な共通理解が成立するための条件を明確にすることが

できるという……現象学はまさにこの立場をとろうとする」(p. 241) という。

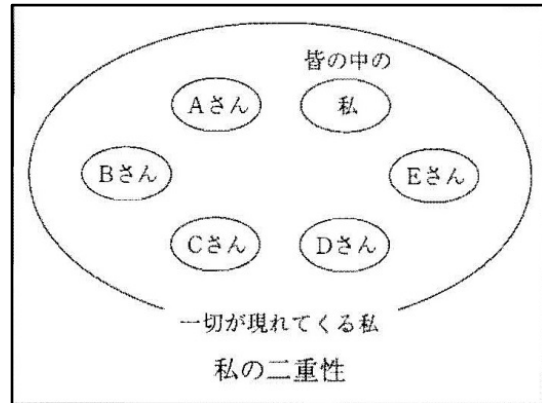
これでは前門の狼(=主客の難問)を追い払うために、後門から虎(=自他の難問)を導き入れることになってしまうのではないか。共通理解が成立するには自他の同型性への確信が前提となるが、主客一致問題より自他同型性問題がやさしいという保証はないからだ。そもそも、ふつう私たちが主客の難問などに気づかずに生きているのは、無自覚のうちに認識というものを「他人モデル」で考えるからだろう。

—赤い花が私と友人Aの間にあるとして、赤い花があるという客観的認識がいかにか成り立つかをモデル化する場合、赤い花からの電磁波がAの目に飛び込んで網膜像を結び、さらに視覚系を伝わってAの脳内に〈赤い花〉という像が成立する(ということが脳画像法で確かめられる)。だから私は客観的「赤い花」と主観的〈赤い花〉の間的一致を照合できる。そして次に、私はなぜか、この「他人モデル」を自分自身に当てはめてしまい、私に現れている〈赤い花〉の原因が客観的「赤い花」だということは、すでに照合済みだと思ってしまうというわけだ。したがって主客問題の核心は、「私はなぜ自己と他者の同型性を確信しているのか」という自他の難問にある。

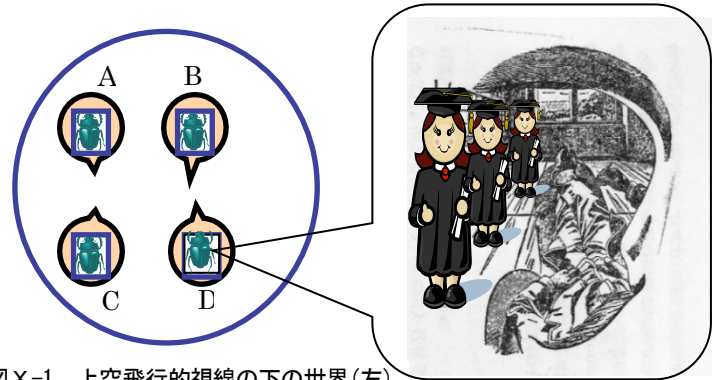
自他問題は現象学では周知のように間主観性問題として扱われているが、西も「この疑問にもフッサールはきちんとした説明を与えてこなかった」(第10章)という。このあたり、西さんも分かっているな、という気もするが、その後は何となくはぐらかされてしまう。そして、次のようなことを言い出す—「この、他者と共有世界の意味の『発生』という問題をきちんと理論的にとり扱うためには、むしろ、乳幼児が養育者と関わりあいながら成長していく様子をていねいに観察しながら、自我と他者と世界の意味の形成過程を理論化すべきだろう」(p. 347)。ここには、現象学者によくみられる発達心理学への過大評価がある。なぜならこのような研究自体、自然的態度によってなされる他はなく、理論化しても論点先取の誤謬を必然的に含んでしまうから。それを避けたいならば、一人称的回想データのみに基づく現象学的発達研究を、一から構想する必要がある。

元に戻るが、「私の二重性」の図は自我体験の現象学的図解に期せずしてなっていると書いた裏には、もう一つ意味がある。この図は、自他の難問の図解でもある。なぜなら、自他の同型性からして、私だけでなくAさんもBさんもすべての他者に、「私の二重性」が現れる世界がそこからひらけなければならないから。

この問題を説明するのに評者は、次の図解を使うことにしている [6] (p. 50)。「図X-1」で、左が



自然的態度に現れて来る世界、私であるDは「皆の中の私」である。これに対し右が、有名なマッハの自画像にAさんBさんといった他者の出現を書き加えたもので、「一切が現れてくる私」に相当する。すると右図と左図がなぜAやBやCでなくDで結びついてい



図X-1 上空飛行的視線の下の世界(左)とマッハの自画像に出現した他者(右)

るのかという、自我体験の問いが起こる。また、他者の実在を確信することは、AもBもCもマッハ的自画像世界がそこからひらける場であることを確信することとなるが、これが自他の難問をもたらす。なぜなら私がDである以上、AやBの世界を覗き込んで確かめるわけにはいかないから。さらに言えば自他の難問は、主客の難問の場合のようにうっかり「共通了解」に訴えることができない分(訴えたら論点先取の誤謬になってしまう)、主客難問より難易度が高い。この本での現象学のとらえ方が、前門の狼(=主客難問)を追い払って後門の虎(自他難問)を入れるようなものと、書いた意味が分かるだろう。

西さん、いいかげん、主客難問の背後に真の難問である自他の難問が隠れていることを認めて、本格的に取り組んでみませんか。

実はそのためのヒントも西の他の著作には隠れている—「誤解をおそれずにいえば〈他者は、さまざまな異なった条件のなかを生きる「もう一人の私」だ〉ということが現象学の営為を貫く一つの重要な“信条”なのです」[7](p. 184)。確かに西研ファンが読んだら、エエッと驚きそうな文章だ。これに関連するが、評者は最近、「他者の実在を確信するとは、〈私がおそれる他者として生まれたような可能世界〉の実在を確信することである」と言うことにしている。けれども、可能世界の実在を信じるとはいかなることか。それが現象学の究極の問いとなるはずではないか。

参考文献

- [1] 西研(2005)『哲学的思考—フッサール現象学の核心』<ちくま学芸文庫>, 筑摩書房.
- [2] ラングドリッジ, D. (2016)『現象学的心理学への招待』田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子(訳), 東京: 新曜社.
- [3] 渡辺恒夫 (2018)「他者になる夢の現象学的解明」, *質的心理学研究*, 17, 66-86.
- [4] 能智正博(編者代表) (2018)『質的心理学辞典』新曜社
- [5] 渡辺恒夫 (2009)『自我体験と独我論的体験』, 京都: 北大路書房.
- [6] 渡辺恒夫 (2014)『他者問題で解く心の科学史—心の科学のための哲学入門②』, 京都: 北大路書房.
- [7] 西研 (2015)「人間科学と本質観取」『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』(小林隆児・西研(編)) (pp. 119-185), 東京: 新曜社.